

幼児の父親と母親に対するイメージの分析

大 瀧 ミドリ*

(平成9年11月13日)

要 旨

25～55か月児と大学生を対象として、父親と母親に対するイメージ、男子と女子に対するイメージ及び子どもの性別認知とその恒常性との関連について分析し、以下の結果を得た。

- 1 父親と母親に対する弁別的イメージは、「大小」「黒赤」「長短」など具体的レベルで明確に形成されていた。しかし、「多色」「濃淡色」「波形」「行動」などについては明確な弁別イメージを形成していないことが明らかになった。特に、この傾向は42か月前の子どもに顕著に認められた。
- 2 いずれの月齢においても、男子と女子に対する弁別的イメージの形成は、父親と母親に対する弁別イメージの形成よりも有意に遅く形成されることが明らかになった。この結果は、具体的イメージ対および抽象的イメージ対のいずれにおいても認められた。
- 3 性別自認と性別認識のいずれも、43か月以後に成立することが明らかになった。
- 4 性別における恒常性については、時間経過における恒常性は43か月以後に成立するが、外見的要素に関する恒常性は55か月以後にならないと成立しないことが明らかとなった。

KEY WORDS

幼児 child

両親イメージ parents' images

性別役割 gender role

性別認知 gender cognition

1. は じ め に

できるだけ性別を強調するような生活体験を与えないように育てた男児が、3歳の時に本人のお気に入りの色である「ピンク」の水筒を選び、4歳になってもその水筒を愛用していた。しかし、4歳時には、「ままごとは、女の遊びだから おれは遊ばない」など、ジェンダーを反映するような発言も出てきた。その子どもの母親は、前述したような変化の要因として、子どもが熱中していたアニメの影響を指摘した。確かに、男子が熱中するアニメには、戦闘ものが多く、男は正義のために強く逞しく果敢に戦うこと（攻撃性）を肯定する情報が、ヒーローの姿を介して提供される。子どもは、ヒーローの行動模倣や創造的再演であるごっこ遊びなどによってヒーローの行動を内在化させてゆく。近年、差別撤廃条約や行政主導による「男女共同参画社会の形成」に向けた取り組み¹⁾もあり、子ども向けのメディアの内容にも制作者側の自主規制や外部からチェックが働くようになり^{2,3)}、性別役割を強調する傾向は軽減した。しかし、

* 生活・健康系教育講座

子どもの性別役割意識の形成には、このような外的要因だけでなく、原初的知覚の関与が指摘されている。例えば、子どもの言語発達、特に対語の発達を見た場合、最も早期に獲得される対語は「ある—ない」(1歳6か月)である。ついで、「同じ—違う」(1歳8か月～1歳11か月)、「いい—悪い」(1歳4か月～2歳0か月)、「大きい—小さい」(1歳11か月～2歳0か月)と続き、「長い—短い」(2歳1か月～4歳9か月)、「高い—低い」(2歳6か月～4歳4か月)などが続く⁴⁾。これらの中で「大きい—小さい」は、他の形容詞対語に比較して短期間に獲得される概念である。また、「大きい—小さい」は、知覚可能な対象の性質を形容する性状語(大きい—小さい, 多い—少ない, 太い—細い, 濃い—薄い, 広い—狭い, 高い—低い, 長い—短いなど)の最も基本的な対語であり、他の多くの性状語は、「大きい」「小さい」という対語から派生したものと考えられている⁵⁾。また、形容詞「大きい」が、「小さい」よりも先に獲得されるのは、乳幼児が小さいものよりも大きい対象に強い関心(偏好)を示す知覚特性と関連があり、普遍的な発達の傾向と考えられている⁶⁾。この「大きい—小さい」の形容詞対は、男性と女性の象徴的概念と深くかかわっている。つまり、男は身体が大きく、力が強いという知覚的理解が、男性に対する根源的イメージをなし、逆に、小さく弱いという知覚的理解が女性に対する根源的イメージをなす。しかし、子どもは最初から男性と女性に対しこのようなイメージを形成するのではなく、父親と母親に対する知覚的イメージから男性・女性イメージを般化されると考えられている⁷⁾。つまり、子どもは、まず、自分の身近で暮らす父親と母親に対し形容詞対的知覚イメージを形成し、そのイメージが男性と女性に対するイメージに般化し、さらに「男」「女」という言語の理解と獲得によって、男性と女性の性別弁別に安定性と一貫性を与え、性別認知における恒常性が達成されると考えられている。

大久保の初語に関する縦断研究によると、「男」「女」の語の初発年齢は、2歳9か月であった。しかし、この年齢では「ママハ オトコダ」などの誤用が確認されており、この年齢では安定した意味内容をもつ語として、「男」「女」の語が使用されていない⁸⁾。子どもが自分の性別を自認できる、つまり、自分の性を言語で正しく表現できるとする年齢は研究者により異なっている。例えば、深谷は3歳0か月から3歳6か月頃であるとし⁹⁾、渡辺は3歳後半から4歳前半に可能になるとし¹⁰⁾、大久保は自分の性に関する表現が固まるのは4歳前後であるとしている¹¹⁾。また、性別認知に関する恒常性について高橋は、5,6歳の男児に「どうしたら女の子になれると思うか」と聞くと、「スカートをはけばいい」などと外見的变化により性別が変わると考えているが、9,10歳になると、「この世には、自分はたった一人しかいないので、どんなことをしても、他の人にはなれない」と回答するようになり、この頃に性別認知の恒常性が確立すると指摘している¹²⁾。Bemも就学前の子どもは外見的・身体的特徴の違い(髪が長い、スカートをはいているなど)を性別認知の手掛かりとすることを見出だしている¹³⁾。一方、深谷は、4,5歳にかけて恒常性が確立すると指摘しており¹⁴⁾、性別認知の恒常性に関する獲得についても年齢が特定されていない。

本研究では、性別自認の確立過程にある2歳から4歳児を研究対象として、子どもが自分の性別認知が可能となる以前に父親と母親に対して分化したイメージを形成し、その後に男女(男子・女子)のイメージが形成されるという経時的変化および性別自認と性別認知の恒常性との関連について検討する。また、大学生を研究対象とすることで、子どもの父親と母親および男女(男子・女子)に対するイメージの特徴を明らかにする。

2. 方 法

研究対象：上越市内の保育園児および家庭児66名である。対象児の年齢範囲は、生後25か月（2歳1か月）から55か月（4歳7か月）である。内訳は、男児34名、女児32名である。対象児を25か月から42か月児群35名（男児15名、女児20名）および43か月から55か月児群31名（男児19名、女児12名）に分けた。子どものイメージの特徴を見るため、大学生87名（男子34名、女子53名）を対象とした。

研究方法：約30年前に行われた深谷の研究方法を一部修正して使用した¹⁵⁾。対象児には、個別面接を行い、反応はすべてテープレコーダに録音した後、記録用紙に転記した。質問は、絵カードなど刺激図版・実物と言語を用いた。大学生には幼児と同じ図版・実物を用い、回答は直記式により集団施行した。

研究内容：質問項目は、父親と母親のイメージに関する項目12問、男子と女子のイメージに関する項目2問、性別認知に関する項目8問、計22問で構成されている。各項目の細目は、以下の通りである（*具体的イメージ項目、**抽象的イメージ項目）。

①父親と母親のイメージに関する項目

色彩4*：多色（赤、青、黄、桃、黒）、2色2問（赤・黒、淡青・若草色）、同系の濃淡色（青、濃青）

大小3*：大小3問（全体的形状、部分的形状、量的意味を含みもつ部分的形状）

長短1*：長短（長短鉛筆）

重量1**：軽重（重さが異なる同形の動物玩具）

波形1**：波形（鋭角と曲線）

表情1**：表情（笑顔と恐い顔）

行動1**：行動（対抗と逃避）

②男子と女子のイメージに関する項目

色彩1*：2色（赤、黒）

波形1**：波形（鋭角と曲線）

③性別認知に関する項目

性別自認1：自分の性別認知

性別認知3：自分以外の性別認知3問（男児・女児、両親、人形）

性別認知の恒常性4：経時的恒常性3問（自分の近未来、未来、希望）、外見的恒常性（洋服の着替えによる変化）

3. 結果及び考察

1 父親と母親に対するイメージ

(1) 色イメージ

「赤、青、黄、桃、黒」の同形の蝶々の絵を提示し、父親と母親のイメージに合う色の選択を求めた。大学生の場合は、父親に対する色イメージは、黒(74.7%)、青(23.0%)、

赤(2.3%)の順であり、父親イメージとして黒が選択される傾向が明確に認められた。25-42か月児の場合は、黒(45.7%)、青(20.0%)、赤(11.0%)、ピンク(8.6%)の順であり、父親イメージとして黒が選択される比率が高いものの、その比率は大学生に比較して有意に低いものであった($x^2=9.406, df=1, p<.01$)。43-55か月児の場合は、黒(64.5%)、青(19.4%)、赤(3.2%)、ピンク(3.2%)、黄(3.2%)の順であり、父親イメージとして黒を選択する比率が高く、大学生との間に有意差は認められなかった。母親に対する色イメージは、大学生は、赤(75.9%)、ピンク(20.7%)、黄(2.3%)、黒(1.1%)の順であり、父親で黒を選択したほとんどのものが母親に対して赤を選択した。25-42か月児の場合は、ピンク(42.9%)、赤(17.1%)、黄(14.3%)、青(11.4%)、黒(5.7%)の順であり、母親に対する色イメージは大学生と有意な差異が認められた($x^2=35.580, df=1, p<.001$)。43-55か月児の場合も、ピンク(41.9%)、赤(35.5%)、黄(9.7%)、青(6.5%)の順であり、ピンクが最も高い比率を示し、母親に対する色イメージは大学生と有意な差異が認められた($x^2=16.435, df=1, p<.001$)。母親イメージとして赤を選択する比率は、加齢に伴う有意な増加が認められる($x^2=40.188, df=1, p<.001$)が、ピンクの比率には有意な変化は認められず、多色の場合には母親イメージが赤に収斂する傾向があるかどうかは明らかではなかった。父親に対する色イメージは黒と青色に集中し、母親に対しては赤とピンクに集中しており、色イメージにおける父親と母親の分化は加齢とともに鮮明になることが明らかになった。

選択色を赤と黒の2色とした場合、対象児のいずれの月齢でも父親については黒を選択し、母親については赤を選択しており、月齢による有意差は認められなかった。つまり、対比的な色イメージとして父親と母親イメージを質問した場合には、25-42か月児であっ

表1 父親と母親に対するイメージ

父 親	色 彩				大 小			表情	波形	行動	重量	長短
	多色黒	黒	水色	濃	形大	部分形大	部分形大	怖い顔	鋭角	対抗	重い	長い
25-42か月群	16 45.7	27 77.1	11 31.4	16 45.7	30 85.7	30 85.7	29 82.9	25 71.4	18 51.4	13 37.1	19 54.3	26 74.3
43-55か月群	20 64.5	29 93.5	7 22.6	21 67.7	31 100.0	29 93.5	30 96.8	30 96.8	7 22.6	12 38.7	18 58.1	29 93.5
大 学 生	65 74.7	83 95.4	65 74.7	68 78.2	79 90.8	86 98.9	80 92.0	76 87.4	59 67.8	57 65.5	69 79.3	76 87.4
母 親	多色赤	赤	黄緑	淡	形小	部分形小	部分形小	笑顔	曲線	逃避	軽い	回避
25-42か月群	6 17.1	27 77.1	12 34.3	11 31.4	30 85.7	29 82.9	27 77.1	27 77.1	17 48.6	16 45.7	18 51.4	— —
43-55か月群	11 35.5	30 96.8	7 22.6	21 67.7	31 100.0	28 90.3	30 96.8	30 96.8	7 22.6	13 41.9	18 58.1	— —
大 学 生	66 75.9	83 95.4	65 74.7	66 75.9	79 90.8	85 97.7	77 88.5	79 90.8	63 72.4	57 65.5	68 78.2	— —

でも大学生と同じような対比的な父親イメージと母親イメージを持ち、両者を明確に分化していることが明らかになった($x^2=20.629, df=1, p<.001$)。

しかし、表1に示すように黄緑と水色のように視覚的対比があまり鮮明でない場合は、いずれの月齢の対象児も大学生のように父親と母親に対比的イメージを持たないことが明らかとなった($x^2=24.381, df=2, p<.001, x^2=26.151, df=2, p<.001$)。

また、同系色の濃淡における父親と母親イメージについて見た場合、父親イメージにおける43-55か月児と大学生間に有意差はないが、25-42か月児は大学生に比較して父親と母親イメージの分化する比率が有意に低かった($x^2=12.252, df=1, p<.001$)。母親イメージについては、43-55か月児と大学生が、25-42か月児より分化したイメージをもつことが明らかになった($x^2=7.203, df=2, p<.01$)。25-42か月児は同系色の濃淡の場合も、父親と母親イメージの分化が不鮮明であることが明らかとなった。

(2) 大小イメージ

表1に示すように全体的形状と部分形状および量的イメージを伴う部分形状のいずれの場合も、25-42か月児の77.1~85.7%は、大学生と同じように父親に大きいイメージを、母親に小さいイメージを対応させていた。父親と母親に対する「大きい-小さい」イメージは、他のイメージに比較して分化しており、25-42か月児も「大きい-小さい」イメージで、父親と母親を明確に弁別していることが明らかになった。この結果から「大きい-小さい」イメージが父親と母親に対するイメージの根幹をなすものであることが示唆された。

(3) 表情、波形、行動イメージ

表情について見ると、大学生は父親に怖い顔を、母親に笑顔に対応づけており、父親と母親は分化したイメージでとらえていた。25-42か月児の場合も、71.4%および77.1%と高い比率で、父親には怖い顔を、母親には笑顔に対応づけていた。しかし、それらの比率は、大学生より有意に低かった($x^2=4.443, df=1, p<.05, x^2=5.679, df=1, p<.05$)。43-55か月児の場合も、父親と母親に対する表情イメージは明確に分化しており、大学生と有意差はなかった。このことから3歳前半と後半で父親と母親に対する表情イメージがより明確に分化することが明らかになった。

波形イメージについては、大学生においても表1に示した他のイメージと比較して父親と母親に対するイメージの分化が不鮮明であった。いずれの月齢の対象児にも同様な傾向が認められた。しかし、43-55か月児の父親と母親に対するイメージは、25-42か月児や大学生の結果と大きく異なっていた。父親に対して鋭角波形イメージをもつものは、大学生は67.8%、25-42か月児51.4%であるのに対して、43-55か月児は22.6%と低い比率を示した。逆に父親に対して曲線波形イメージをもつものは、大学生は32.2%、25-42か月児は40.0%であるのに対して43-55か月児は74.2%と高い比率を示した。つまり、25-42か月児の父親イメージは鋭角波形と曲線波形の比率が類似し、特定のイメージへの集中化は認められないが、43-55か月児の場合は、父親に対して曲線波形を選択するものが多く、大学生のイメージと逆のイメージであった($x^2=17.948, df=1, p<.001$)。また、母親に対して曲線波形イメージをもつものは、大学生は72.3%、25-42か月児は48.5%、43-55か月児は22.6%であり、鋭角波形イメージをもつものは、大学生は27.6%、25-42か月児は42.9%、43-55か月児は74.2%であった。つまり、大学生の場合は、父親イメージとして鋭角波形を対応づけるものは、母親イメージとして曲線波形と対応づけており、両親に対

するステレオタイプ化されたイメージをもっていた。しかし、43-55か月児は、父親イメージとして曲線波形を対応づけているものは、母親イメージとして鋭角波形を対応づけており、大学生とは全く逆のイメージをもっていることが明らかになった($\chi^2=20.030, df=1, p<.001$)。

行動イメージについて見ると、父親の行動として対抗イメージをもつものは、大学生65.5%、25-42か月児37.1%、43-55か月児38.7%であり、逃避イメージをもつものは、大学生23.0%、25-42か月児14.3%、43-55か月児58.1%であった。25-42か月児の場合は、課題事態を理解していない応答をしたものが48.6%あった。しかし、43-55か月児の場合、その比率は3.1%と低く、課題は理解されていた。父親に対し43-55か月児は逃避イメージを持ち、大学生は対抗イメージを持ち、両者は明確に異なっていた($\chi^2=6.764, df=1, p<.01$)。母親に対して逃避イメージをもつものは、大学生65.5%、25-42か月児45.7%、43-55か月児41.9%であり、対抗イメージをもつものは、大学生23.0%、25-42か月児22.9%、43-55か月児58.1%であった。大学生の多くのものは、父親に対抗イメージをもつものは、母親に逃避イメージを持っており、やはりステレオタイプ化されたイメージを両親に対して形成していた。しかし、43-55か月児の多くのものは、父親に逃避イメージを、母親に対抗イメージを持ち、大学生とは逆のイメージを形成していた。

波形や行動など具象的でないものに関する43-55か月児の父親と母親に対するイメージのいずれも、ステレオタイプ化したものと異なっていた。どのような過程を経て大学生のようなステレオタイプ化されたイメージが形成されるのか、今後検討する必要がある。

(4) 重量、長短イメージ

父親に対する重量イメージについて見ると、父親に重いイメージをもつものは、大学生79.3%、25-42か月児54.3%、43-55か月児58.1%であった。大学生は、父親に対して重いイメージを持っているが、25-42か月児および43-55か月児の多くは大学生ほど特定のイメージに集中したイメージをもっていなかった($\chi^2=6.151, df=2, p<.05$)。母親に対して軽いイメージをもつものは、大学生78.2%、25-42か月児51.4%、43-55か月児58.1%であった。母親について大学生の多くは軽いイメージを持っているが、いずれの月齢の対象児の多くのものは、大学生ほど特定のイメージに集中したイメージをもっていなかった($\chi^2=6.151, df=2, p<.05$)。

父親に対する長短イメージについて見ると、大学生もいずれの月齢の対象児も父親に長いイメージを持っていた。25-42か月児より43-55か月児の方が、父親に対して長いイメージを持つものが有意に多かった($\chi^2=4.392, df=1, p<.05$)。

25-42か月児と43-55か月児の父親に対する重量イメージと長短イメージを比較すると、25-42か月児では有意ではないが、43-55か月児では重量よりも長短イメージにおいて、父親に分化したイメージをもつものが有意に多かった($\chi^2=10.641, df=1, p<.01$)。先に大小イメージが、父親と母親の基本的イメージの可能性を指摘したが、「長い-短い」は「大きい-小さい」から派生した両極性を示す形容詞対であるため¹⁶⁾、派生語でない重量イメージよりも早く分化した可能性が考えられる。

2 男子と女子に対するイメージ

(1) 色イメージ

具体的レベルにおける男子と女子に対するイメージを見るために、父親と母親イメージを質問した同じ図版（黒と赤）について、どちらが男子であり、どちらが女子であるかを質問した。結果は表 2 に示すように、男子に対して黒イメージを、女子に対して赤イメージをもつものは、25-42か月児は37.1%、43-55か月児は64.2%、大学生は90.8%であった。男子と女子に対するイメージは、加齢による有意な変化が認められた($\chi^2=62.729, df=2, p<.001$)。

つまり、25-42か月児では男

子と女子を赤と黒に対応させて弁別しているものは少ないが、43-55か月児では明確に対応づけるものが多いことが認められた。父親と母親については先に見たように、25-42か月児で77%以上のものが父親を黒に対応づけ、母親を赤に対応づけていた。しかし、男子と女子に黒と赤を対応づけた25-42か月児は37.1%にすぎなかった($\chi^2=11.433, df=1, p<.001$)。対象児は男子と女子に対してよりも、父親と母親に対して早期に分化したイメージを形成することを示しており、父親と母親に対する弁別的イメージが、男子と女子のイメージに般化する可能性がこの結果から示唆された。

(2) 波形イメージ

抽象的レベルにおける男子と女子に対するイメージを見るために、両親イメージでも使用した曲線波形と鋭角波形の図版を使用した。その結果、大学生の場合は、男子に鋭角波形イメージ(72.4%)、女子に曲線波形イメージ(74.7%)と明確に分化していた。しかし、25-42か月児の場合は、男子に鋭角波形イメージ(45.7%)と曲線波形イメージ(40.0%)をほぼ同率で対応づけており、特定の波形への集中化は見られなかった。また、女子に対しても25-42か月児は、鋭角波形イメージ(42.9%)と曲線波形イメージ(37.1%)について類似した比率を示していた。43-55か月児の場合は、男子に鋭角波形イメージ(35.5%)より

表 2 男子と女子に対するイメージ

上段N 下段%

対 象 者	イメー ジ 対 象	色 彩		波 形	
		黒	赤	鋭角	曲線
25-42か月群	男子	13 37.1	17 48.6	16 45.7	14 40.0
	女子	12 34.3	13 37.1	15 42.9	13 37.1
43-55か月群	男子	20 64.5	9 29.0	11 35.5	19 61.3
	女子	10 32.3	20 64.5	19 61.3	11 35.5
大 学 生	男子	79 90.8	7 8.0	63 72.4	24 27.6
	女子	6 6.9	79 90.8	22 25.3	65 74.7

表 3 性別自認と性別認識

上段N 下段%

	性別自認		男子の絵		女子の絵		父 親		母 親		人 形	
	正答	誤答	正答	誤答	正答	誤答	正答	誤答	正答	誤答	正答	誤答
25-42か月群	13 37.1	22 62.9	13 37.1	22 62.9	10 28.6	25 71.4	12 34.3	23 65.7	15 42.9	20 57.1	9 25.7	26 74.3
43-55か月群	30 96.8	1 3.2	25 80.6	6 19.4	27 87.1	4 12.9	31 100.0	0 0.0	31 100.0	0 0.0	27 87.1	4 12.9

も曲線波形イメージ(61.3%)を対応させ、女子に鋭角波形イメージ(61.3%)を対応させているものが多く、男子と女子のイメージは分化していた。しかし、その分化の仕方は、大学生のステレオタイプ化したイメージとは異なっていた。先の43-55か月児の父親と母親に対する波形イメージの結果と比較すると、男子と女子に対するイメージと対応しており、両者の比率に有意差はなかった。

3 言語による性別自認と性別認知

自分自身の性別について、25-42か月児で正しい性別自認ができたものは37.1%であるのに対して、43-55か月児は96.8%のものが正しい性別自認を行っていた。絵に描かれた子どもの性別認知について見ると、43-55か月児の場合、自分の性別自認に比較して男子の絵に関し正しく性別認知できる比率は、有意に低くかった($\chi^2=4.026, df=1, p<.05$)。また、父親と母親に関する性別認知についてみると、25-42か月児ではほとんどのものが正しい性別認知ができないのに対して、43-55か月児では全員が正しい性別認知を行っていた。正しい性別自認および認知を行う比率は、25-42か月児と43-55か月児の間に有意差があり、いずれの場合も43-55か月児ではほぼ完全に可能となることが明らかになった。

42か月以前の言語による性別自認および認知と父親・母親に対するイメージの分化の関連について見ると、イメージ分化の方が言語による性別自認の前に可能となっていた($\chi^2=10.333, df=1, p<.01$)。また、男子と女子イメージの分化と言語による性別自認・認知との関連について見ると、42か月以前では有意差は見られないが、43か月以後になると、男子・女子イメージの分化も性別認知も可能となり、両者の間に発達の交互作用があることが推察された。

4 性別認知における恒常性

性別認知の経時的恒常性を見るために、子どもの近未来(「あなたは大きくなるとお兄さんになるの? お姉さんになるの?」)、未来(「あなたはもっと大きくなるとお父さんになるの? お母さんになるの?」)、希望(「あなたは大きくなったら、

表4 性別認識における恒常性

上段N 下段%

	自分の近未来		自分の未来		将来の希望		洋服の着替え	
	正答	誤答	正答	誤答	正答	誤答	正答	誤答
25-42か月群	12	23	11	24	7	28	9	26
	34.3	65.7	31.4	68.6	2.0	80.0	25.7	74.3
43-55か月群	28	3	26	5	27	4	8	23
	90.3	9.7	83.9	16.1	87.1	12.9	25.8	74.2

お父さんになりたいの? お母さんになりたいの?」について質問した。その結果は、表4に示すようにほとんどの25-42か月児は、性別に関する経時

的恒常性を保持していなかった。43-55か月児では性別に関する経時的恒常性は確立していた。しかし、ほとんどの43-55か月児は、提示した男の子の人形に「スカート」をはかせた後に、人形の性別を再質問した場合には、外見的な洋服(スカートなど)に惑わされて、性別認知を誤まるものが多く、外見적인見え方に左右されない性別認知における恒常性は獲得していないことが明らかになった。

4. お わ り に

42か月以前の子どもは、「大小」「黒赤」「長短」など具体的レベルに関するイメージについて、父親と母親に分化したイメージを形成しており、それらは社会的にステレオタイプ化されたイメージと一致するものであった。また、42か月以前の子どもの多くは、言語による正しい性別自認はできないが、43か月以後に急激にできるようになることが明らかになった。このことから、性別自認が可能となる前に父親と母親に対するイメージが明確に分化することが明らかになった。また、父親と母親に対する弁別イメージは42か月以前に形成され、男子と女子に対する弁別イメージの形成は、43か月以後に形成されることから、男子と女子を弁別するイメージは、父親と母親に対するイメージから般化したものであることが示唆された。さらに、男子と女子に対する弁別イメージの形成と言語による性別自認および認知がほぼ同じ月齢に可能となっていることから、これらのイメージは父親と母親に対するイメージからの般化だけでなく、言語能力の関与も示唆された。しかし、55か月以前の子どもの性別認知は、十分な恒常性を有しておらず、外見の見える方で性別認知が大きな影響を受けることが明らかとなった。つまり、親が意図的に子どもの行動を性別役割に基づいて方向づけることは無関係に、子どもは知覚的イメージに基づいて形成したステレオタイプ化した性別イメージを内在化させていることが明らかになった。先に、「はじめに」のところに例示した親の意図に反した子どものジェンダー的発言は、母親の指摘するようなアニメの影響がなくとも、自然発生的に発現する現象と考えられる。もちろん、母親が懸念するように子どもが熱中しているアニメなどに描かれている登場人物の行動特性などが、子どもの内在化している性別イメージと合致する場合には、性別役割の獲得を強化する可能性は十分考えられる¹⁷⁾。アニメだけでなく、性別役割を意図した親のしつけ、隠れたカリキュラムといわれる無意図的な親の生き方・態度・行為など、ジェンダー的認識を強化する要因は子どもの生活環境には数多く存在している。それゆえ、子どもの生活環境が性別役割分化が明確であればあるほど、子どものジェンダー的認識や行動が強化されることとなろう。高橋は、投影法によって5歳児は成人と同じステレオタイプ化された性別役割観を持つことを見出だしており、性別役割観として内在化された価値基準がすでに幼児期に確立する可能性を示唆した¹⁸⁾。

また、子どもは知覚的に「大きい」ものをより好む（偏好）傾向を持つという知覚的特徴によって、「大きい」ものは「小さい」ものよりも価値があるという、価値観が生み出される。このことによって父親イメージと母親イメージおよびこれらのイメージから般化した男女（男子・女子）イメージにも価値観が持ち込まれることになる。その結果、存在として対等である男性・女性に、女は男より劣った性（男は女より優れた性）という価値が付加される危険がある。それゆえ、人間として等質な価値を有する男性と女性が、知覚的価値観によって等価でない存在として色付けされることを意図的・教育的に排除してゆく方策を確立する必要性を本研究は明らかにした。

本研究にご協力を頂きました高志保育園の年少児および年中児の皆さん、家庭児と保護者の方々、上越教育大学の学生の皆さん、データ収集および分析を援助いただきました橋本友美さんに衷心より感謝を申し上げます。

引 用 文 献

- 1) 男女共同参画推進本部(1996) 男女共同参画2000年プラン男女共同参画ビジョン 内閣総理大臣官房男女共同参画室
- 2) 奥田暁子 鈴木みどり訳(1976) 子どものテレビこれでよいのか 聖文舎
- 3) 子どものテレビの会編(1981) テレビと子ども 学陽書房
- 4) 大久保愛(1967) 幼児言語の発達 東京堂出版
- 5) 国立国語研究所(1969) 幼児の語彙能力 東京書籍
- 6) 村田孝次(1972) 幼稚園期の言語発達 培風館
- 7) 東清和 小倉千加子(1982) 性差の発達心理 大日本図書
- 8) 同掲書 4)
- 9) 深谷和子(1965) 性差意識の形成過程 (1) 東京教育大学教育学部紀要 11,123-133,
- 10) 渡辺真理子(1977) 幼児における性差意識・性役割に関する研究 その1 日本教育心理学会第19回総会発表論文集
- 11) 同掲書 4)
- 12) 高橋恵子(1984) 自立への旅立ち 岩波書店
- 13) Bem, S.L. (1989) Genital knowledge and gender constancy in preschool children. *Child Developm.*, 60, 649-662.
- 14) 同掲書 9)
- 15) 同掲書 9)
- 16) 同掲書 5)
- 17) Bussey, K., & Bandura, A. (1984) Influence of gender constancy and social power on sex-linked modeling. *J. Personal. Soci. Psychol.*, 47, 1292-1302.
- 18) 同掲書 12)

Analysis of children's Images of Father and Mother

Midori OTAKI*

ABSTRACT

This study was made to clarify children's images of their father and mother, and to find out the correlation between children's gender cognition of their own and of others. The following results were obtained through interviews with 2,3 and 4-year-old children, divided into 2 groups (group A: from 25 to 42 months old, group B: from 43 to 55 months old), as well as university students for comparison: the pictures showing opposite pairs of concrete images such as "big and small" and abstract images such as "confronting and avoiding" were shown to them to find out their images of their father and mother, their images of boys and girls, their gender cognition of their own and of others and its constancy. Children's distinctive images of their father and mother are clearly formed on the concrete images, but not on the abstract images. This tendency is more conspicuous among the children in group A. The distinctive gender images of boys and girls are formed significantly later than those of father and mother among the children in group A. This is found in both opposite pairs of concrete and abstract images. Gender cognition of their own and that of others are formed when children are 43 months old or older. The constancy of gender cognition of others regardless of their appearances is formed when children are 55 months old or older, while the constancy of gender cognition of themselves, in other words their own gender is fixed and has not changed and will not for life, is formed when they are 43 months old or older.

* Division of Physical Education, Home Economics and Technology Education: Department of Home Economics Education